

## 近藤寛司氏 コンテックス株式会社代表取締役会長

ここ数年、JAPAN ブランド育成支援事業のもとで「今治タオルの復活!!」が話題になっているが、今治タオルがテイクオフできた背景に、それ以前の苦境における「もがき」と「迷い」と「決断」があった。

政府によるセーフガードの見送りや「タオル業界構造改善ビジョン」の策定など、タオル業界全体が分水嶺に立つなかで、近藤寛司氏は自社の社長、そして四国タオル工業組合と日本タオル工業組合連合会の理事長を歴任し、将来業界が進むべき道を、忍耐強く着実に選んできた。現在はコンテックス(株)の代表取締役会長として、第一線から一歩退いたところで自社と業界の未来を見つめる。

---

こんどう・かんじ ☆ 1947年、今治市宅間生まれ。1970年、慶應義塾大学商学部を卒業したのち、2年間アメリカの大学院でマーケティングを学ぶ。1984年創業のコンテックス(株)の三代目として代表取締役社長を1999年から13年間務め、2012年より現職。タオル業界が戦後最大の苦難に陥るなか、2000年に四国タオル工業組合理事長、2004年には日本タオル工業組合連合会理事長に就任し、リーダーシップを発揮。



近藤寛司氏



## 1. 松下幸之助の経営哲学を受け継いだ二代目の父と近藤繊維工業株式会社

### 生涯尊敬する経営者は3人、そのうちのひとりが二代目の近藤憲司、父である

最初に、今回「タオルびと」として焦点を当てる近藤寛司氏（以下、寛司氏）が三代目を務めたコンテックス(株)の歴史を、表1を参照しながら振り返ろう。

コンテックスの前身は、1934年に祖父の近藤<sup>むねいち</sup>宗一氏（以下、宗一氏）が創業した近藤タオル工場である。宗一氏が中古の織機6台を購入し、借地にタオル工場を建てたところからコンテックスの歴史は始まった。戦後すぐに近藤繊維工業所に改称され、二代目となる父親の近藤憲司氏（以下、憲司氏）が社長に就任した1952年に、近藤繊維工業(株)に改組され法人化された。

今治市宅間にある本社玄関前に、ひとつの銅像が建立されている。創業者の宗一氏の銅像である。石の台座の裏には、宗一氏、憲司氏、寛司氏の三代にわたる歴史が記述されているので、ここに引用してみる。



本社に建立された初代近藤宗一氏の銅像



明治廿九年 七代宗一が十歳の時 父善七が綿ネル工場の経営と米相場に失敗 宗一の苦闘は明治末期まで続く 昭和九年五月宗一は近藤織維工業所を創業タオル生産を始む 十四年三月長男憲司が松下電器に入社 不思議な早さで松下幸之助社主に格別の知遇を得るも 廿四年一月家業を継がせる為かえす

廿五年五月当社来訪の松下社主より 和歌山の松下家も明治中期に米相場で破綻したという 同じ悲運の歴史を直接聞かされた宗一は 俄に心に大きな広がりを感じる 松下的経営理念を身につけた憲司に 相場には手を出さな 事業は堅実第一の二つの確かな指針を重ねて与える

宗一の晩年は 中四国ランドセニア現役最高齢ゴルファーとして ゴルフ三昧の優雅な日々で 休日ごとに楽しむ明治生まれの宗一 大正生まれの憲司 昭和生まれの寛司の三代ゴルフの醍醐味は 昭和五十年七月四日 宗一が八十九歳で

隆法院殿光徳宗心大居士として来世に移ることによって終る

正面玄関を入ると、こんどは2つの銅像が建っている。1つに二代目の憲司氏の銅像、2つに憲司氏の右腕として活躍した技術者の柳下富五郎やなした氏の銅像である。現在のコンテックスの原型をつくった両輪である。会社は憲司氏の代に大きく成長し、息子の寛司氏をして「生涯尊敬する経営者は3人いるが、そのうちのひとりが二代目の父である」と言わしめるほど、憲司氏は経営者として優れた業績を残した。

憲司氏は、愛媛県立今治西高等学校を卒業後、いったん大阪外国語学校（現・大阪大学外国語学部）に入学するが、すぐに同志社高等商業学校（現・同志社大学商学部）に入学した。この経緯について寛司氏は、父親の英語への憧れによる外国語学校への入学があり、当時今治の織物業を牽引していた柳瀬一族や阿部（株）の子弟が同志

社に学んだことへの憧れによる同志社への編入学だったのではないかと理解している。戦前の今治では、男子は同志社へ女子は神戸女学院へのルートが確立しており、とくに同志社は織物業に携わる子弟たちの憧れの学び舎だった。

表1 コンテックス株式会社沿革

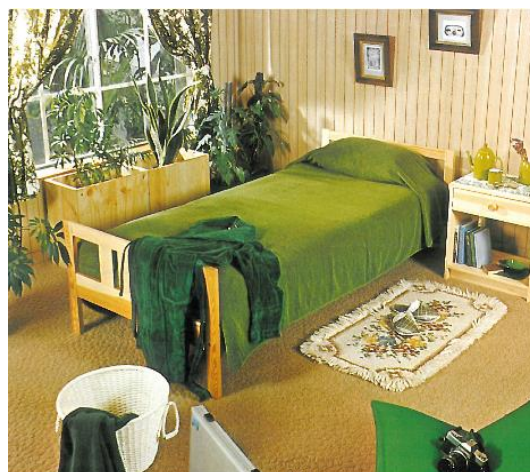
年	月	内容
1934		近藤宗一（初代）が個人事務所として近藤タオル工場設立
1942		企業整理の際、優秀工場として残存
1945	10	近藤繊維工業所に改称し操業開始
1950		現在のタオルガーデンの場所に工場を移転
1951	3	商標「コンテックス」登録
	4	全国に系列販売機構（販売代理店制度）確立 織機を改良し「ソフケット」と名付けたタオルケットを開発
1952	6	近藤繊維工業株式会社に改組し、社長に近藤憲司（二代目）就任
1963	6	自社ブランド「アンダケット」を開発し、実用新案特許を取得
1969	10	社歌「コンテックス行進曲」制定（山上路夫作詞・いずみたく作曲）
1975		自社ブランド「ホワイトエレガンス」発売
1976	6	革新無杼織機導入
	12	配送センター・倉庫竣工
1978		自社ブランド「コットンレースの詩」開発
1982	11	贈答用パッケージに全自動箱折機導入
	12	自社ブランド「キャンディリボン」開発
1983	12	全自動タオルヘム切断機導入
1989	4	カラーコンピュータ・グラフィックデザインシステム導入
1990	11	高品質・商品管理の高効率化のための自動検反システム導入
1991	5	自社ブランド「ロビンソンスワールド」開発
1995	2	新工場竣工 電子ジャカード搭載高速織機・大型整経機・自動搬送車導入
	5	自動両頭耳巻機・自動両頭ヘム縫機導入
1999	6	近藤憲司代表取締役会長、近藤寛司（三代目）代表取締役社長に就任
2002	7	コンテックスタオルガーデンがオープン
2003	2	東京インターナショナルギフトショー出展
2005	12	東京の東日本橋に営業所開設
2007	6	福岡の博多に営業所開設
2008	6	コンテックス株式会社に社名を変更
2012	7	近藤寛司代表取締役会長、近藤聖司（四代目）代表取締役社長に就任

出典： コンテックスHPより作成。

同志社を卒業した憲司氏は、松下電器産業(株)（現・パナソニック）へ入社し営業部、人事部をへて、その後出世街道を歩いていった。戦後、憲司氏は、松下電器産業の労働組合結成に直接関与したことから、松下幸之助のもとで仕事をする機会を多くもち、信頼できる部下のひとりとして幸之助の経営哲学を身近で学んだ。しかし1949年、憲司氏は、家業のタオル工場を継ぐために、惜しまれながら松下電器産業を退社し帰郷する。

憲司氏は、近藤繊維工業所入社後、幸之助の経営手法に倣ってさっそく改革をおこなった。1951年、まず「コンテックス」の商標登録をおこない、自社ブランド確立に向けて布石を打った。つぎに、東京、大阪、名古屋、大分にあったタオル専門問屋と販売契約を結び、地区別代理店としてメーカー主導の流通網を構築した。そして、新しい商品「ソフケット」と名付けたタオルケットを開発した。1952年の社長就任と近藤繊維工業(株)への社名変更後、さらに快進撃はつづく。

表2は、1951年から2012年において「コンテックス」ブランドのもとで開発された商品の一覧である。1960年代をピークに、憲司氏の右腕となる技術者・柳下富五郎氏とタッグを組んで、「キッチン・ロールタオル」や「コンテックス・ラッパー」、「アンダケット」などほぼ毎年のように新商品を開発し、1988年まで右肩上がりの売上を記録した。




1951年発売のソフケット

表2 自社開発商品一覧

年	商品名	特徴
1951	ソフケット	厚手のタオルケット
1952	ソフトタオル	皇室御愛用最高品質として評価を得た柔らかなタオル
1953	ウィークリータオル	7色の曜日入りタオル
1954	コンテックス・ディズニー・タオル	キャラクターのデザイン入りタオル
1955	ソフベット	厚手の生地を使ったバスルーム&キッチン用マット
1956	保湿襟カバー	掛布団に取り付けて肩口を保温するマフラー式襟カバー
1957	フリーカッティング・タオル	自由に切って使えるタオル
1959	ソフトカバー	保温性の高い座布団カバー
1961	キッチン・ロールタオル コンテックス・ラッパ	台所やトイレ用に便利な回転式タオル 車や室内で使って便利な膝掛けタオル
1963	アンダケット	足元や襟元に冷気が入らないための保温寝具
1964	イーシーカット・マイサイズ・タオル	フリーカッティング・タオルの改良版でロール状になっており贈答用に開発
1965	ソフラー	室内やスポーツ、フィッシング用のタオルマフラー
1966	ソフケットF	タオルケットとして使用した後、バスタオルやソファークバーとして再利用できるタオルケット
1967	ナフキンスタンド	常に乾いたキッチンタオルをストックするスタンド
1970	クリスタル	パイル部分に無糊30番手の単糸を使用したソフトな風合いと同系色の柔らかい色彩の先染め糸を使用したジャカード織タオル
1972	武者小路実篤画集タオル	武者小路実篤の画集を再現したタオル
1975	ホワイトエレガンス	3色特殊ボーダー織りのタオル
1978	コットンレースの詩	レース縫付けカラータオル
1982	キャンディリボン	リボン柄刺繍タオル
1985	多色バスマット	ジャカード織りの先染め多色のタオルで動物や風景柄の厚手バスマット
1991	ロビンソンスワールド	アウトドア用シリーズのタオル
2004	IMAhitoシリーズ	Imabari Maker's Artisanの頭文字を取ったIMAhito(イマビト)シリーズのタオル
2005	ママズセレクト 布ごよみ	素材、縫製などベビー向けに開発したタオル 薄い、軽い、長いをコンセプトにした新感覚の手ぬぐいタオル
2006	コットンインデックス	新しい販路であるインテリア専門店を意識したタオル
2010	えべすや フラックスライン	創業当時の屋号「えべすや」を冠した着色抜染技法のタオル インテリア雑貨店向けタオル(国内外用)
2011	ラーナ	海外市場向けコットンインデックス
2012	ブレラ	ラーナの後続シリーズでワッフルタイプのタオル

出典： コンテックス(株)提供資料。

自社ブランドの知名度を上げるためのマーケティング活動も怠らなかつた。憲司氏は、著名人を起用した広告を雑誌や新聞などのマスメディアに掲載し、大々的に宣伝活動をおこなった。タオルメーカーの世界では、斬新ともいえる方法である。たとえば、1963年のアンダケットと1964年のイージーカット・マイサイズ・タオルでは当時売れっ子だった岡田茉莉子を起用し、「アサヒグラフ」などの雑誌や中央紙に掲載して「コンテックス」ブランドの認知向上に努めた。



岡田茉莉子を起用した1963年のアンダケット（左）



1964年のイージーカット・マイサイズ・タオル（右）

こうした憲司氏の改革は、時代にも後押しされ十分な成果を出していった。1934年創業のタオル工場は、高度成長期をとおして今治を代表するタオルメーカーに発展を遂げていく。（次号につづく）

